

秦始皇帝陵

中国の最初の皇帝は秦始皇帝であり、従って最初の皇帝陵は始皇帝陵ということになります。秦始皇帝陵は、陝西省西安市の東部に位置し、現在は、墳丘(一辺約350m、高さ51m)のみが残っていますが、調査の結果この墳丘は始皇帝陵の一部であり、周囲には多数の施設があったことがわかっています。

兵馬俑坑

始皇帝陵関連の施設として最も規模が大きく、著名な施設が「兵馬俑坑」ですが、1974年に農民が井戸を掘るときに偶然発見するまでまったく知られていませんでした。「俑」とは副葬を目的に作成された人形や動物・器物の模型を指し、「兵馬俑坑」とは兵士の人形や戦闘に使われた馬車(戦車)の模型が納められた「坑」(地下施設)ということになります。始皇帝陵の兵馬俑坑は墳丘から東方に1kmの位置にあり、4つの坑で構成され、納められた兵馬俑は8,000体と推定されています。この兵馬俑の特徴は、等身大で、しかも写実的につくられていることにあります。

各俑坑は大きさに違いがあり、1号俑坑は長さ230m、幅62m、面積は14,260㎡、兵馬俑は6,000体と推定されています。2号俑坑は東西84m、南北96m、面積は6,000㎡、兵馬俑は1,300体と推定されています。3号俑坑は東西21m、南北18m、面積は520㎡、兵馬俑は72体が出土しました。

1号坑は、最初に大きな坑を開けて底面を版築で固め、隊列ごとに枠を作り枠の中に土を盛って壁をつくります。壁の間に兵馬俑を配列させてから天井を被せて、最後に全てを埋めてあります。

軽装備の歩兵俑は、1号俑坑の前方に配置されていました。歩兵の俑は、装飾のない実用的な鎧を着用し、攻撃命令を待っているかのように緊張した面持ちのものが多数出土しています。隊列の後の部分はまだ発掘中で、出土時の俑は倒れて埋まっています。

2号俑坑からは射手、戦車、歩兵、騎兵の俑が見つかっています。跪射俑は弩弓と呼ばれる武器を手にしていました。弩弓は木製のため土中で朽ちてしまい原形を留めていませんが、矢の先端に装着するやじりなどによって、武器の実物を装備した状態で配列されていたことをうかがい知ることができます。

南端の部分は4頭立の戦車に御者と2人の兵士が乗る戦車部隊が整列していて、この戦車部隊が2号坑のほぼ半分を占めています。当時の戦争は戦車が主体で、対戦する戦車がすれ違いざまに“戈”と言う兵器で互いに切り付けあう戦いでした。

当時の兵士は髪を伸ばして頭上に束ねていましたが、冠をかぶり、飾りのついた鎧を着ている俑もあります。実戦での機能性よりも装飾性を重視した身なりから、軍団の指揮官を写した「将軍俑」と考えられています。

馬の俑の近くからは、御者俑などが出土しています。2000年以上も土中に埋もれて朽ちてなくなっていますが、木製の車両があり戦闘の指揮をとる馬車が埋められていたと思われます。これらの俑の構成から2号俑坑はおそらく機動部隊の野営地を表していると考えられます。

3号俑坑はかなり小さく、馬俑が4つとその後方に兵士俑が4体あり、その間に朽ちてなくなった木製の馬車がありました。前列中央に御者が立ち、その斜め後方に軍吏、その両脇に車士がいることから、軍令を伝達する指揮官専用車と推測されています。

その他に爰(しゅ)と呼ばれる木製の棍棒を持った兵士俑が壁に沿って立ち並んでおり、儀仗兵と考えられることから、3号俑坑は軍団指揮所を模した坑だと推定されています。

墳丘周辺の施設

始皇帝陵の周辺では分布調査やボーリング調査が行われ、墳丘を取り囲む二重の城壁があったことがわかっています。内側の「内城」は南北1,355m、東西580m、城壁の幅は8.4m、外側の「外城」は南北2,180m、東西970m、城壁の幅は7.2mで、この城壁内に多数の施設があったことがわかっています。

陪葬坑が200基近くも見つかっていますが、墳丘西側では青銅製の馬車2台を埋納した「銅車馬坑」が見つかっています。馬車は屋根がなく、代わりに傘が備え付けられた「立車」と屋根付きの「安車」です。いずれも本来の馬車の

二分の一のスケールで作られていると考えられます。「安車」は密閉された車輿で、前後2室に分かれており、前室は御者が座る場所で、後室は寝そべて乗ることができ、壁の内外面と天井の内面に龍と思われる文様が施されています。

墳丘の北側で見つかった長さ50mの陪葬坑の俑は、甲冑で身を固めた兵馬俑坑の俑とはまったく異なる姿をしていました。頭には冠を頂き、顎紐を胡蝶結びにして冠を固定し、袖と裾の長い衣を身にまとい、腰に革帯を締め、長ズボンを穿き、足には四角い靴を履いています。この俑の右側の腰帯に、二つの小さなものが貼り付けられていて、「削」とよばれる小刀と、小刀を磨くための「砥石」だと考えられています。秦の時代、文字は竹簡の上に書き、書き間違えたときには、小刀でそこを削り、その上にまた書きました。小刀が切れなくなると、砥石で研いでいたので、これらの俑は、文書を取り扱った「文官」であると思われます。

墳丘東南部で発見された東西40m、西部幅16m、東部幅12.3m、深さ3～4mの陪葬坑からは、大きな銅製の鼎と11体の俑が出土し、銅鼎は重さ212キロ、高さ60センチ、口径70センチもあり、秦代で発見された最大の鼎でした。復元された俑は、高さ約180センチの等身大で、上半身は裸、頑健な体つき、突き出た腹、短い半ズボンを穿き、両手で何かを握って直立していたり、前後に足を開き、片手を上にあげて何かを持ち上げていたりします。古代中国では、重い鼎を持ち上げる「扛鼎」という雑技が行われていて、その様子を再現した雑技俑と考えられています。

内城には墳丘の北側にボーリング調査により、寝殿・便殿遺跡も見つかっています。これらは祭儀に関わる建築です。寝殿・便殿遺跡については、後の時代の『漢書』韋玄成列伝に以下のような記述があります。

『漢書』韋玄成列伝

日祭於寝、月祭於廟、時祭於便殿。寝、日四上食。廟、歳二十五祠。便殿、歳四祠。又月一游衣冠。

(訳:墓園中には寝殿と便殿があった。日ごとに寝殿で祭り、月ごとに廟で祭り、四季ごとに便殿で祭った。

寝殿では一日に四回食物を供進し、廟は年に二五回祀り、便殿では一年に四祭した。また月に一度、先帝の衣冠を遊行させた)

墳丘西部では倒壊した建物の瓦列、および石敷の遺構が発見されていて、出土した陶片には「驪山飮食官」とあります。食官については漢の時代の歴史書である『後漢書』百官志/太子少傅の条に以下のような記録があります。

太子食官令一人、六百石。本注曰:主飲食。

(訳:太子食官令は一人、六百石である。‘注:主に飲食にかかわる’)

このことから、漢代には皇族などの住居には食事を司る「食官」と呼ばれる部署があったことがわかり、この食官は皇帝陵にも置かれており、遡って秦代にも置かれていたのだと思われます。

また、『漢書』百官公卿表には、

奉常、秦官。掌宗廟禮儀。有丞。景帝中六年、更名太常。…中略…。又諸廟・寝・園・食官令・長・丞。

(訳:奉常は秦官である。宗廟の儀礼をつかさどる。丞が有る。景帝中六年に太常と改名した。

…中略…。また、すべての廟・寝・園・食官に令・長と丞がある)

との記載があり、改名された太常については『後漢書』百官志 太常の条で、

太常、卿一人、中二千石。…中略…。每月前晦、察行陵廟。…後略…。

(訳:太常は、卿で一人、中二千石である。…中略…。毎月晦の前に、陵廟に察行する。…後略…。)

陵食官令 先帝陵、每陵食官令各一人、六百石。…後略…。

(訳:先帝陵、陵園ごとに令が各一人、六百石である。先帝陵には、陵ごとに食官令各一人がいる。六百石である。)

とあります。これらから、始皇帝陵で発見されたこの遺構は食官の址と考えられています。

まとめ

始皇帝陵では、墳丘を中心に、使う馬車、仕える文官、宴席で楽しませる雑伎の俳優、さらに軍団などをほぼ原寸大で再現していました。また、食官のように生活の世話をする部署も設置されています。始皇帝が死後も生前と同じ待遇を受けて生活することを前提としたものであると考えられます。

中国では死者は消滅せず、死後も存在するといった死生観があり、死者とともに副葬品を埋葬していました。戦国

時代には、墓葬は死者の生活の場であるとの認識が強くなり、王などの上層階層の墓葬(陵墓)には、多数の生活用品が副葬されるようになっていきました。始皇帝陵は、戦国時代の墓葬の延長線上にあると考えられます。

始皇帝は王を越える位として「皇帝」を称しました。皇帝は比較する者が不在であり、死後も保持すべきだと考えられていました。そのため、始皇帝陵では生前の咸陽の宮廷や施設を陵墓に再現することが計画されたと考えられます。『史記』の「墓中に宮殿門観を造り、百官の席を設け、珍奇な器物を御府から移して充満した」との記述は、そのような始皇帝陵を描写したものでしょう。

ただし始皇帝陵は、従来の戦国王墓をはるかに上回るもので、始皇帝陵は統一帝国の偉容を象徴する施設として相応しいものといえます。

前漢皇帝陵

前漢皇帝陵は都である長安(現在の西安)の郊外に造営されました。少帝恭と少帝弘を除く前漢の皇帝の11の陵は、咸陽の南から西安北部を東西に流れる渭河の北側に9つが、南側の西安の南東に2つが分布しています。

陽陵

第4代皇帝である景帝の陵墓である陽陵は長安の北側にあり、陵園、陪葬墓園、陵邑から構成されています。陵園は土壁で囲まれていて、土壁は東西1,850m、南北1,350mあって四面に門がありました。陵園の中には帝陵、皇后陵、陪葬坑(北区、南区)、羅経石と建築遺跡の四つの施設がありました。

帝陵は一辺418mの壁で囲まれ、四面に門があり、このうち、南開門が発掘されています。内から外部に排水溝が見つっています。墳丘は一辺168m、高さ32.3mで、ボーリング調査によると墓道が墓口の四辺に設けられていることがわかっています。

皇后陵は一辺350mの壁で囲まれ、四面に門があり、墳丘は一辺160m、高さ26.5mです。ボーリング調査により、墓道が墓口の四辺に設けられていることがわかっています。

帝陵の周囲には96の陪葬坑が見つかり、帝陵陵壁と陵園南区のものが調査されています。帝陵陵壁の陪葬坑の規模は一定しておらず、長さが最も短い7号坑は4m、長い陪葬坑は90mもあります。幅は2.6~4mで、一般的には3mで、深さは3m前後です。

陵園南区には24基の陪葬坑が見つかり、幅はほぼ4mですが長さは一定せず、120m~291mが8基、58m~87mが3基、25m~50mが13基となっています。深さは6m前後です。

まとめ

漢は、秦の制度を基本的には引き継いだとされ、帝陵についても、秦始皇帝陵を継承しています。例えば①陵園を設ける、②墓室外に副葬品を納める埋蔵坑を設ける、③生前と同様の生活を送るための器物や俑を副葬する、④皇帝陵での祭儀をおこなうための施設を建てる、といった点です。

一方、違いも見られます。①始皇帝陵での陪葬坑は形状・配列ともに不規則でしたが、前漢帝陵では形状は規格化され、整然とした配列がとられます。②始皇帝陵では明確ではなかった、皇后陵が帝陵と併置されます。

前漢帝陵は、始皇帝陵に始まる皇帝陵の墓制を継承し、それを整備したものといえます。始皇帝陵のように原寸大、等身大と言ったような器物はなく、その意味では始皇帝陵ほどの浪費はなかったと考えられます。また埋蔵坑では食料の比重が高く、皇帝の生活の場としての意味合いが強くなっているとの印象があります。

秦の行き過ぎた政策を是正し、着実な統治が行われ、国家体制が定着するようになっていきました。帝陵のあり方も、そういった漢のあり方を反映しています。

後漢皇帝陵

後漢は都を洛陽に置いていて、従って皇帝陵も洛陽にあります。後漢の皇帝陵は前漢に比べて保存状態が悪く、なお不明な点が多くあります。皇帝陵は、前漢同様に都城の南北に分布しています。

考古学調査

洛陽の北部は「芒山」と呼ばれ、歴代の墓区となっていますが、後漢帝陵北区はこの芒山に位置しています。現在のところ、墳丘として残存状態が良好なのは大漢冢・二漢冢・三漢冢で、いずれも直径100m程度の円墳です。また朱倉地区では4基の陵墓と陵園が確認されています。

後漢の帝陵については、『後漢書』が西晋の皇甫謐が著した『帝王世紀』を注に引く形で、後漢11帝陵の記録が残っていて、洛陽から東南と北西に約半数づつ分布します。ところが、清の乾隆年間に龔崧林が芒山を踏察し20余の墳丘を命名し、11陵すべてを洛陽から北西の芒山に充ててしまったことから大混乱を引き起こす結果となっています。後漢帝陵の比定問題は、振出しからスタートしなければならないらしく、講義でも被葬者への言及はありませんでした。

塩沢裕仁氏は現地踏査を繰り返し、その著書の中で大漢冢を6代安帝陵、二漢冢を8代順帝陵、三漢冢を9代冲帝陵と推定しています。

まとめ

後漢の帝陵はわからない部分が多いが、以下のような特徴があります。① 後漢帝陵は、埋葬施設・墳丘と陵園から構成され、前漢帝陵から変化はありません。② 埋葬施設は、堅穴土坑となり、墓道は1方向のみに付設されず。この点は4方向に付設される前漢帝陵とは異なります。③ 墳丘は円丘となっていて、前漢帝陵の方形と異なっています。④ 前漢帝陵にあった外蔵櫛は無くなっています。⑤ 墳丘外部には陵園の建築物がみられます。

おわりに～秦漢皇帝陵の変遷

中国の皇帝陵は秦始皇帝陵に始まり、咸陽での生活を原寸で再現したものです。始皇帝陵は埋葬施設のほかに多数の施設を伴い、陵園を構成していました。戦国時代の陵墓を凌駕し、最初の皇帝陵として相応しいものです。

前漢時代は、始皇帝陵を継承しながら、それを整理、縮小したものとなっています。施設を伴う陵園、方形の墳丘、墓道を伴う墓坑、墳丘周囲の外蔵坑といった施設は、継承、整理したものである反面、俑を小型化するなど、合理化が図られています。初代劉邦は、秦の過酷な法制度をあらため「法は三条のみ」といって、現実的な政治を行ったとされますが、このような前漢の指向性が、皇帝陵の合理化をもたらしたのでしょう。

後漢時代は、継承しながらも、変化が見られます。墳丘は円形へと変化、墓道は一方向のみ、外蔵坑も無くなっています。帝陵の副葬品は少なくなり、造営コストの減少となったことは明らかです。使われる1本を除くその他の墓道は象徴的なものと考えられることから、合理化されたものでしょう。

儒教が社会の基本理念となったことも、皇帝陵のさらなる合理化を進めることになったと考えられます。墳丘の変化も儒教との関連を考えるべきかもしれません。

中国皇帝陵の特徴は、墳丘と埋葬施設のみではなく、その周囲に祭祀を行う施設があることです。現在、皇帝陵では墳丘のみが残りますが、築造時には周辺には大規模な建築物があったのであり、景観は大きく異なっていたことは注意する必要があります。